

然の姿で流れている。

『鳳凰台』李白
やはり未練の残る宮廷生活であつた。

鳳凰臺 李白

鳳凰臺上鳳凰遊

鳳凰台上鳳凰遊び

鳳去臺空江自流

鳳去り台空しゅうして江自ずから流る

吳宮花艸埋幽徑

吳宮の花艸は幽径に埋もれ

晋代衣冠成古丘

晋代の衣冠は古丘と成る

三山半落青天外

三山半ば落つ青天の外

二水中分白鷺洲

二水中分す白鷺洲

總為浮雲能蔽日

總て浮雲の能く日を蔽うが為に

長安不見使人愁

長安見えず人をして愁しましむ

【語句の意味】

鳳凰台

六朝時代に南京城の西南隅に建てられた高殿

江

金陵（今の南京）に都した吳の宮殿

宮

静かな小道

幽徑

金陵の西南にある山で長江に臨み南北に3つ並んでいる峰々

三山

結局は 総括すれば

浮雲

浮き雲 ここでは邪臣

日

太陽 ここでは玄宗皇帝

【詩の意味】

昔、鳳凰が鳳凰台上で遊んだというが、今はその鳳凰も飛び去り、台もさびれてしまつて、ただ長江の水のみが自

かつて三国時代の吳の宮殿に美を競うて咲いた花や草は、今や、静かな小道に埋もれ、東晋時代に豪奢な衣冠をまどい、権勢を誇った王侯貴族も今では古い丘の土となつてしまつた。（台上から眺めると）三山は上半分が雲で覆われているので青天のかなたから半ば落ちかかるかのように見え、秦・淮の二水は二つに分かれて白鷺洲を挟んで流れている。

（今自分は讒言にあつて流刑の身となり、辺境をさまよっているが）邪臣が玄宗皇帝の賢明さをふさぐように、浮雲が日を覆い隠しているために、都長安の方角もわからず、私の心を悲しませるのである。

【鑑賞】

○この詩は金陵の名勝鳳凰台を訪ね、昔の栄華にもはかなさを感じ、今も変わらぬ自然の美しさに感動し、さらに長安を追放された身を嘆いて作られたものである。

○この詩の本題は

「登金陵鳳凰台」

金陵というのは今南京市である。戦国時代（紀元前3世紀ごろ）この地に王気が立ち上るというので金を埋めてこれを鎮めたという伝説があつて金陵の名が生まれたといわれている三国時代（3世紀）に、呉の孫權がここを都として建業と言つた。南北朝時代（5世紀）の南朝の国々も建康と名を変えたこの地を都として、たいそう華やかに栄えた。唐代では都ではなかつたが、南宋時代では再び都となつた。その後、清時代になり北京に対し南京と呼ばれた。古都中の古都と呼んでもいい。

○鳳凰台の伝説

六朝の宋時代に金陵の西南にある山に美しい鳥がたくさん飛来して群舞した。五色の模様や孔雀のような形、鳴き声の美しい鳥を人は鳳凰と呼び、ここに高台を築いて鳳凰台と名づけたという。鳳凰は「廣辭苑」によると「麟・龜・



龍と供に尊ばれた想像上の鳥。前は麟、後は鹿、頭は蛇、尾は魚、背は亀、顎は燕、嘴は鶴に似て、五色絢爛、声は五音にあたり梧桐に宿り、竹実を食い、醴泉を飲むといい、聖徳の天子の兆しとして現れる。」とある。

○崔顥の「黃鶴樓」との類似

宋の嚴羽が「滄川詩話」の中で「（黄鶴楼の詩は）唐人の七律の詩、當に此れを以て第一と為すべし」と述べているように第一級品であることには間違いないが、なにかことの「鳳凰台」と並列して論じられる。同じ宋の敬優孝（計有功の表記もある）の「唐詩紀事」には「李白が後に黄鶴楼を訪れた時『眼前に景あれども言ふを得ず。崔顥の類詩上頭に在り』とあつて、以上の詩は作れないと述懐している。その後李白は金陵の鳳凰台を訪れた時に崔顥の詩を念頭に、対抗するがごとくこの詩を作っている。特に優劣を争おうとしたわけではなかろうが崔顥の「黄鶴樓」によく類似している。たとえば「鳳凰台上鳳凰遊び鳳去り台空しうして江自ずから流る」と「黄鶴樓」の「昔人已に白雲に乗じて

去り此の地空しく余す黃鶴樓」という首聯において伝説を取り入れた同趣性と「黃鶴」鳳凰を冒頭に三回置用していること、しかも同じ韻字であること、さらに後半の「白鷺洲」と「鸚鵡洲」の中洲を配していること、そして尾聯ではともに故郷に思いをはせ、しかも「人をして愁しましむ」の同一表現は偶然とは思えないほどで、何か意図があつたのかもしれない。このあたりも鑑賞の一助に加えてよいのではなかろうか。ついでながら「使人愁」の読み下しは諸本では「人をして愁へしむ」となっている。

【出典】

「唐詩選」「唐詩三百首（上巻）」「古文真宝（前集）」

【備考】

42歳47歳ころの李白の動向

李白は42歳のころ南方の地から北上し長安にやつてきた。当時詩名のあつた賀知章の知遇を得て玄宗に謁見を許され、翰林供奉の役職を得て、おかげの宮廷詩人となつた。玄宗の宴席には常に侍り、あの有名な「清平調詞」を見るようには楊貴妃とも席を同じくするほど高貴な人である。その後の2年間は宮中に在つて生涯のうちで最も得意な時期を送る。

ところが翰林院にあつて酒を沈飲することが多く、44歳

ころ玄宗の重臣である高力士に靴を履かせ辱しめたことが原因で、李白の厚遇をうらやむかれらの讒言に遭い、陰謀にはまり、3年後には樂園の如き生活から玄宗・楊貴妃のもとを追放され放浪の旅を続ける運命となつた。45歳のとき杜甫・高適・岑参らと各地を交遊する。南の蘇州に移る。46歳で「蘇台覽古」「越中懷古」などの名作を残した。47歳には揚州から金陵に遊び、「金陵の鳳凰台に登る」を作る。47歳といえばまだ追放の事件から3、4年しか経過していないのでひとしきを都が恋しいころと思われる。この詩には作者をおとしめた邪臣のしわざや玄宗・楊貴妃の意外な薄情ぶりに対する恨みも込められている。

【参考】

なぜ李白は「詩仙」なのか

杜甫がその教養の基礎を儒教に求めたのとはちがつて、李白は「老子」や「莊子」を読み、道教思想に近い。「山中問答」に見るよう山中に隠棲し、世俗を避ける傾向がある。さらに性格が常人離れして豪放磊落といわれる。常識を超えた自由奔放な詩風と豊かな想像力を駆使した詩は李白独創的ものがある。さらに自らも認める天才的文学才能を持ち、人々から「天上の謫仙人（この世の人でなく天界で罪を犯して人間界にたまたま流された仙人のような人）」と評されている。だから詩人の中の仙人なのである。